



2013年10月発行

神に祝福された人生

「わたしはもう死んでもよい。お前がまだ生きていて、お前の顔を見ることができたのだから。」
(創世記 46 章 30 節)

ヤコブにとって、息子たちがもってきた報告は、腰を抜かすほどのことでありました。死んだとばかり思っていた息子のヨセフが生きていただけでなく、その上、エジプト全国を治める者になっているというのですから。これは今でいうと、死んだと思っていた子供がアメリカの大統領になっていたようなものです。ヨセフがヤコブの一家を招いたので、ヤコブは神のお許しのもと、一家 70 名をあげてエジプトに向かって出発しました。

ヤコブとヨセフが 20 数年ぶりに再会した時の涙と喜びについて、私は語るべき言葉を持ちません。

ドイツの文学者トーマス・マンは「ヨゼフとその兄弟」という小説の中でこう書いています。ヨセフがまず口を開いて「父よ、ゆるしてくださいますか」と言います。昔、自分が父親に可愛がられていることで傲慢になってしまい、そのために兄たちを怒らせ、父親を困らせたことを謝罪するのです。するとヤコブは「神がわれらをゆるされたのだ」と答えます。

この小説の中で、ヤコブがいちばん気にしていたのは、ヨセフがエジプトという異教社会の中で、信仰を失い、墮落してはいないかということでした。ヨセフがエジプトで宰相の地位にまで昇りつめたことは確かに驚くべきことです。しかし、その地位に必然的に伴ってくる多くの誘惑と危険があります。たとえヨセフにどれほどの権力と財産があったとしても、もしもその魂を損なってしまったら、父親にとって喜びは悲嘆へと変わってしまうでしょう。その場合、ヤコブの「わたしはもう死んでもよい。お前がまだ生きていて、お前の顔を見ることができたのだから」という言葉はなかったでしょう。

親子の再会の喜びは、ヤコブにとって、ただ死んだはずのヨセフに会えただけではなく、この息子が信仰を失わず、試練と誘惑の中にあってもそれを守り通したことを知ったところにあったのです。

いまヤコブの上に光が射しています。ヤコブは波乱万丈の生涯を送った人で、その人生は試練の連続ばかりのようです。しかし、彼は心のもっとも深いところで、神にすべてをゆだねて生きてきました。初めはずるがしく陰険な性格だったヤコブが、彼と共におられた神から訓練を受け、やがて神と格闘するほどの気迫をもって信仰の生涯を全うしていたのですが、ここで神から最後のご褒美として安らかな死をたまわったように見えます。

…もともと、皆さんにはその日は遠いです。死ぬまでにしなければならぬことがたくさんありますし、まだまだ自分を変えて行かなくてはなりません。安らかな死はまだ数十年はあとになると思って下さい。

さて、ヤコブとヨセフのような感動的な出会いというのはそれほど多いものではありません。実際には、永らく探していた人に会ったとたん幻滅し、会わなかった方が良かったと思うこともあるでしょう。しかし、それは神が自分たちを導いておられることを知らない人の人生です。ヨセフに信仰が残っていることを認めたことがヤコブの何より大切な喜びだったのです。そうだとすれば、少なくとも信仰を守り続けた人々の間で、同じ喜びがないなどどうして言うことが出来ましょうか。また、何十年かぶりに会った人に幻滅を覚え、その人も自分に幻滅したとしても、信仰者ならそこから、その人との新しい関わりが始まるはずです。

神はこのような出会いの喜びを用意なさいます。そして、それは現世に限るものではありません。私たちは、天における再会の日の涙と喜びが、ヤコブとヨセフによって先取りされていると考えて良いのです。

(2013年8月25日の礼拝説教より)

牧師 井上 豊